

学位論文の要旨 (論文の内容の要旨)
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

論 文 題 目
Dissertation title

中国語を母語とする日本語学習者向けの複合格助詞に関する教材開発
—日本語教育文法からの一提案—

広島大学大学院国際協力研究科
Graduate School for International Development and Cooperation,
Hiroshima University
博士課程後期 教育文化専攻
Doctoral Program Division of Educational Development and
Cultural and Regional Studies
学生番号 D103054
Student ID No.
氏 名 謝 冬
Name Seal

本論文の目的は、2000年以降盛んになってきた日本語教育文法の観点から、中国語を母語とする日本語学習者向けに複合格助詞「にとつて」「として(は)」「について(は)」「に対して」に関する教材開発を行うことにある。

従来の複合格助詞研究には、管見に従うと、三つの問題点—①日本語学における複合格助詞研究の記述には文法説明にわかりにくい用語が用いられていたり、意味用法の分類が煩雑しすぎたりして、そのまま教育現場に持ち込める形で整備されていない、②日本語教育の観点からなされた複合格助詞に関する記述は主に句型辞典などで取り上げられてはいるが、学習者の母語に応じた詳細な記述が行われていないことや、各複合格助詞の使用条件が提示されていない、③日本語学の研究成果を取り入れて開発された日本語総合教材の複合格助詞に関する解説は中国語訳などが与えられているだけであり、意味用法の提示が不十分であったり、典型的な例文が挙げられていなかったり、誤解を招きやすかったり、また使用条件や中国語訳とのずれも提示されていない—がある。

これらの問題点を解決するために、本論文では、まず、日本語母語話者の使用実態を見るために、一億語規模の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)から「にとつて」「として(は)」「について(は)」「に対して」の用例を取り出し、excelのピボットテーブルなどを利用し、これらの複合格助詞と共起しやすい語を明らかにしている。その次に、中国国内で広く使われている日本語の総合教材における「にとつて」「として」「について」「に対して」の扱われ方、及びその問題点を論じている。そして、母語話者コーパス調査と教材調査の結果をもとに、学習者コーパス「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベースver. 2」、「華東政法大学作文コーパス」などから取り出した複合格助詞の誤用例も視野に入れ、中国語を母語とする日本語学習者向けの総合教材において「にとつて」「として(は)」「について(は)」「に対して」を取り扱う際に必要不可欠な項目を明らかにしている。

本論文は七章からなる。

第一章では、序論として、本論文の目的と意義、考察対象、研究の方法・資料及び本論文の構成を述べている。

第二章では、日本語教育文法と日本語記述文法との関係、日本語教育文法が目指すものを紹介

し、日本語教育文法に関する本論文の立場を「学習者の母語や習得を考慮し、体系的な文法記述を行う」と捉えている。さらに複合格助詞の研究現状を概観した上で、日本語の複合格助詞を教育文法の観点から考察する必要性を論じている。

第三章では、「にとって」が動詞述語文に使われ、主体として捉えている学習者の誤用例が多いことを出発点とし、まずコーパス調査で「にとって」の先行名詞にヒト・組織名詞、述語に名詞・形容詞がきやすいことを明らかにしている。次に、教材調査で与えられている中国語訳とのずれが説明されていないことや、「にとって」の使用条件が提示されていないといった問題点を解明している。その後で、中国語を母語とする日本語学習者の誤用例を見ながら、「にとって」が使われる文型、意味用法、使用条件、対応する中国語訳とのずれという四つの面から「にとって」に関する教材開発を次のように行っている。

- I. 「Xにとって、AはBだ」という文型に用いる。
- II. X=ヒト名詞・組織名詞、A=名詞性成分、B=名詞・形容詞。
- III. 基本的意味: Xの立場から見れば、「AはBだ」という判断や評価を話し手が行う。
(Xは主体ではなく、受け手である)
- IV. 使用条件:
 - a. 判断や評価を行う必要がある文に使う。
 - b. XとAがある関わりを持っている関係にあると想定しうる文に使う。
- V. 日本語の「にとって」は大体中国語の“对…来说”と対応するが、次の2点で異なる。
 - a. 日本語の「にとって」は主体にならないのに対し、中国語の“对…来说”は主体を表す場合もある。
 - b. 日本語の「にとって」は判断文にしか使われないが、中国語の“对…来说”は判断文に限らず、他の文型にも使える。

第四章では、「として」の意味用法に関する先行研究を教育現場に持ち込みにくいことや、「として」と「としては」との関係に関する記述が一致していないことを問題意識とし、まずコーパス調査を行い、「として」と「としては」と共起する名詞がほぼ一緒であることを解明している。次に、教材調査で「としては」が導入されていないことを明らかにしている。それから、コーパス調査の結果をもとに、「として」「としては」の意味用法を三種類に分け、それぞれと対応する中国語訳、使用条件を考察し、「としては」を「として」の用法の一部と見なすことを主張している。その後で、そうした考察結果をもとに、中国語を母語とする日本語学習者向けの「として(は)」に関する教材開発を次のように行っている。

「として(は)」:

- I. 「Xとして(は)、B」という文型に用いる。
- II. Xには「人・組織名詞」、「抽象名詞」がくる; Bには行為動詞がきやすいが、具体的な動作を表す動詞がきにくい。
- III. 意味用法:
 - a. $X \neq B$ 、且つ $X \neq$ 当時、主、可能性、イメージなどの場合、「Xとして(は) B」は「Xという資格・身分・立場・名目でB(をする/Bである)」という意味を表す。
 - b. $X \neq B$ 、且つ $X =$ 当時、主、可能性、イメージなどの場合、「Xとして(は) B」全体で副詞としてBを修飾する。
 - c. $X = B$ 、且つ $X =$ 方法、理由、例、要因、原因、特徴、結果などの場合、「Xとして(は) B」は「XをBで説明する」という意味を表す。
- IV. 使用条件:
 - a. 他でもない、Xという特定の状況において、Bが成立するときを使う。
 - b. 「主題」や「対比」を表すときは「としては」、そうでないときは「として」を使う。

V. 中国語訳:

(Ⅲa)の意味を表すときは、ほぼ中国語の“作为”と対応しているが、(Ⅲb)の意味を表すときは、中国語の“作为”と対応していない。その中国語訳は、「Xとして(は)」における「X」のみと対応している。(Ⅲc)タイプの「として(は)」は中国語の“是”、“有”などと対応する場合が多く、中国語の“作为”に訳すと、やや違和感がある。

第五章では、「について」「については」にかかる成分に関する記述が不十分であり、それぞれの使用条件も解明していないという問題意識から出発し、まず「について」「については」にかかる成分からその分類基準を述べ、コーパス調査で「について」の後ろに言語系動詞、「については」の後ろに言語系動詞だけでなく、かなり広範囲にわたることを明らかにしている。それから、中国国内で広く使われる総合教材における「について」の扱われ方とその問題点を明らかにしたうえで、中国語を母語とする日本語学習者向けの「について(は)」に関する教材開発を次のように行っている。

「について」:

- I. 「Xについて、B」という文型に用いる。
- II. X=コト・ヒト名詞、B=言語系動詞。
- III. 基本的意味:後ろにくる一つ目の言語系動詞がXを対象とし、そのXと関連することを述べる。
- IV. 使用条件:後ろにくる一つ目の言語系動詞がXと関連することを述べるときに使う。
- V. 中国語訳:ほぼ中国語の“关于”と対応するが、“对”“对于”とも対応しうる。ただ、対象を明確に示そうとすると、中国語の“关于”は使えず、“对于”の使用を要求している。

「については」:

- I. 「Xについては、B」という文型に用いる。
- II. X=コト・ヒト名詞; B=述部全体、述語の形式は問わない。
- III. 基本的意味:後ろにくる文全体がXを主題とし、そのXと関連することを述べる。
- IV. 使用条件:これから述べる文全体がXと関連することを述べるときに使う。
- V. 中国語訳:ほぼ中国語の“关于”と対応するが、“对”“对于”とも対応しうる。ただ、対象を明確に示そうとすると、中国語の“关于”は使えず、“对于”の使用を要求している。

第六章では、「に対して」は述語動詞の直前に使われている学習者の誤用例が多いことを問題意識とし、コーパス調査で「に対して」は述語動詞の直前に使われる用例がごく少ないことを明らかにし、教材調査で「に対して」の提出実態を検討したうえで、中国語を母語とする日本語学習者向けの「に対して」に関する教材開発を次のように行っている。

- I. 「Xに対して、(Aは)B」という文型に用いる。
- II. A=名詞性成分; X=ヒト、コト名詞; B=「行為動詞」「態度・感情」を表す形容詞(「に対して」の直後には「、」「は」「も」がきやすいが、述語動詞はきにくい。)
- III. 基本的意味:述部全体が向かう対象がXであることを明確に示す。
- IV. 使用条件:
 - a. XとBの関係を明確に示す必要がある文に使う。
 - b. XがただBの向かう方向やBと接触する文には使えない。
- V. 中国語の“对”は「に対して」の他に、「に」「を」「について」「にとって」「に向かって」などとも対応しうる。述部に具体的な動作を表す動詞や判断・評価を表す形式がくる場合は「に対して」が使えない。

第七章では、本論文の結論と今後の課題を述べている。

付録として、本論文の考察結果を基に作成した、自学しようとする学習者や中国国内で教鞭を執る現場の教師が容易に使える「にとって」「として(は)」「について(は)」「に対して」の文

法ハンドブックを、中国語版と日本語版でおさめている。

備考 論文の要旨はA 4判用紙を使用し、4,000字以内とする。ただし、英文の場合は1,500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 words.